

どう頑張っても俺には
彼女が見えない

ふーあいあむ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

変わらない朝。また訪れる何の変哲もない学校生活。そんな“いつも通り”に吹き込んできた新しい風―――転入生。しかしその転入生は……。

目次

プロローグ	1
一話	6
二話	10

プロローグ

「ほら、席つけ！」

教室の扉を開け、担任が入ってくる。

喋っていた生徒たちが自分の席へと戻り着席する。

「おい！ 起きんか、明石！」

「……起きてますよ」

名を呼ばれて俺——あかしはるか明石遥は顔を上げた。

俺が起きているのを確認して、担任は教室を見回す。

「よし、全員来てるな。今日の連絡を——」

担任の言葉を聞いて『ああ、今日もまた“いつも通りの”日々が来たな』と感じる。

しかし、今日に限っては“いつも通り”ではなかった。

「——の前に、お前らにいい知らせがある」

教室内がざわめきだす。

「今日、このクラスに転校生が来る」

「——おおおおおおおおッ！」

クラスメイトたちの大合唱に俺は顔をしかめた。

転校生という「いつも通り」ではないことに興奮を感じるのとは分かるが……それにしてもうるさ過ぎる。

「先生！」

「なんだ白沢」

「男ですか？ それとも女ですか？」

白沢という男子生徒が月並みな質問をする。

「どっちだと思う？」

「中間！」

「……お前は何をいつてるんだ、東雲」

「えへへー」

訳の分からない解答をしたのは東雲しのめゆりという女子生徒だ。

クラスのムードメーカー的存在であり、クラス委員長でもある。

「まったく……。転校生は女子だ」

「だって！ やったね、はるくん！」

「……うるさい、東雲。頭に響く」

「えー!? ひーどーいー!?」

こいつとは中学からの付き合いで、言うなれば悪友のようなものだ。

「はあ……イチャつくのは後でやれ、東雲、明石」

「だってき。あとでいっばいイチャイチャしようねー、はるくん！」

「あーそうだねー……」

ちなみにお互いに恋愛感情はない。

「それじゃあ入って来い」

担任が転校生を呼ぶ。

はい、と声が聞こえてから教室の扉が開く。

「うわ……可愛い……！」

東雲のそんな声が耳に入り、入ってきた転校生を見て……そして呆然とする。

視覚から入ってきた情報が理解できなかつた。

いや、むしろその逆だ。

「自己紹介をしてくれ」

「あ、はい」

鈴のような声が響く。

それは聞いている者を癒す伴奏曲のようだ。

「始めまして。小森透子こもりとうこです。父の仕事の都合で転校してきました。これからよろしく

「お願いしますー！」

教室のあちこちから『綺麗』や『可愛い』などと聞こえてくる。

見回せばクラスメイトのほとんどが放心していた。

俺も別の意味で放心している。

「ね、ね、はるくん！ すっごく綺麗な娘だね！」

「……あ、ああ。そうだな……」

「あれ？ 珍しいね、はるくんが女の子のことでそういうこと言うの。いつもは『興味ない』とかなのに」

東雲がなにか言っているが頭に入っていない。

「あー！ 小森さん、こっち見てるよー！」

「え……ま、マジ？」

東雲が言うには小森はこっちを見ているらしいのだが、俺には分からない。

「よーし、なら小森は……東雲の隣に座れ。委員長でもあるから何かわからないことがあつたら聞くといい」

「……っし！ 聞いたね、男子諸君！ 羨ましかろう！ これで私は学園天国！」

「え、えーと……よ、よろしくね、東雲さん」

「ゆりでいいよー、トーコちゃん！」

ぎい、と東雲の隣の席……俺の左斜め前の席が引かれる。

「えつと……よ、よろしくね」

「ほらほら、はるくん！ こんな綺麗な女の子が挨拶してるんだよ？ 無視しちゃダメ

ダメ！」

「……あ、わ、悪い。その……よろしくな」

「はい！」

元気な返事が聞こえてきた。

「じゃあ今度こそホームルーム始めるぞ！」

ホームルームが始まり、クラスメイトが前を向く。

しかし俺は小森の席から目が話せなかった。

それはなぜなら。

どういうわけか。

……俺には彼女の姿が文字通り「見え」なかった。

一話

「お兄！ ほら起きて朝だよ！」

朝、俺の一日は妹の知恵ちえに起こされることから始まる。

「……………おう……………」

「返事しながら二度寝突入とか許さないよー」

知恵が体を強く揺らしてきた。

日に日に強くなっているような気がする。

「ほらほら起きて！ 起きてくれたらチュウウー……」

「いらない」

「まだ言い切っていないんだけど!?!」

完全に目が覚めてきた。

ベッドから出て立ち上がり、知恵の頭を撫でる。

「おはよう、知恵。今日も小さいな」

「いきなりひどい!?!」

知恵は今年で中学二年生だ。来年には受験が控えている。

だと言うのに身長が130cmしかない。

「小学生にしか見えないもんな、お前」

「フツ、私は既にロリ推しで行くことにしたからちよつとしか傷付かないね……!」

「ちよつとは傷付くんだな」

無い胸を精一杯張っているが目尻には涙が浮かんでいた。

「ほら、着替えるから出てけ」

「何々々? 妹に着替え見られるのが恥ずかしいの?」

「穢れる」

「……お兄のそういうとこ、結構好き。私Mだし」

妹の性癖を暴露されたところで何も思うことはない。

「いいからさっさと出ろ。着替えたら行くから」

「……ふっ……うん………ッ!」

さっさと行け。

「あら遙、おはよう」

「……おはよう、母さん」

台所から母さんが声をかけてくる。

机の上には既に朝食が出来上がっていた。

「ん？ 知恵は？」

先に降りたはずの知恵がない。

「知恵なら着替えるって言って部屋に戻ったわ〜」

「……あいつ、俺の部屋に来たときには制服着てなかったか？」

「さあ〜？」

深くは考えないでおこう。

それよりも朝食だ。

「知恵、ふつかあつ！」

いただきます、と言っていざ食べようというタイミングで変なポーズを決めながら知

恵が現れる。

「やられてもいないだろ」

「いやあ、さすがに兄妹でやつちやうのは不味いと思うよー？」

「何の話だ」

時々こいつの将来が心配になる。

あと頭のなかもだ。

「もう、お兄のせいで着替えるはめになっちゃったんだからね！ お気に入りがなくなったの……」

「知らん。何の話をしてるかもな」

知恵は気にせず箸を進める。

「ほらほら、喧嘩しないで早く食べちゃいなさい」

「もう食い終わった」

「お兄はやっ!? よく噛まないでダメなんだよ?」

「ごちそうさま、と言って食器を母さんに渡す。

鞆を手にし玄関へと向かう。

「事故には気を付けるのよ」

「へーへー」

「もう……」

「お兄！ 行ってらっしゃい」

靴を履き玄関を開けた。

空は晴れ渡り、ふわりと春風が頬を撫でる。

「……さ、行くか」

二話

「お、はるくんだ。おっはー」

学校に着くとちやうど登校してきた東雲が挨拶をしてきた。それに挨拶を返し、共にクラスへと向かう。

「でさ、トーコちゃんがねー」

最近のこいつは例の転校生、小森透子の話ばかりしてくる。

「……なあ、東雲。小森ってどんな奴なんだ？」

「……またその質問ー？ 何回するのさ」

小森のことを聞くのは何回目になるのだろうか、自分でも分からない。だが返ってくる答えはいつでも誰でも同じものだ。

「……だから普通の子だってばー」

「これだ。」

まるで魔法にでも掛けられたかのようにだ。

「……そか。そうだったな、悪い」

「もー！ はるくんだってよく話してるでしょ？ トーコちゃん、可哀想だよ」

そう、何故か俺は小森によく話し掛けられる。

いきなり何も無いところから声が聞こえるから、慣れない頃は心臓が止まるかと思つた。

「そ、れ、にいい！ トーコちゃん、もしかしたらもしかするかもしれないんだからあ！」
「はあ……？ ないない」

彼女が見えていない俺では完全には否定できないのだが、とりあえず否定しておく。
こいつは事あるごとに色恋沙汰に結びつけるのだ。

アリ相手に言い出したときは本気で気が触れたのかと思つた。

「えー？ そうかなー？」

「そうだよ」

教室に辿り着く。

頬を膨らます東雲を適当にあしらいながら扉を開けた。

「……あ、おはよう！ ゆりちゃん、明石くん！」

「おつはよう、トーコちゃん！」

「……よう」

やはり見えない。

彼女の姿も、着ているであろう服すらも。

「ねえねえ、トーコちゃん。昨日のテレビ見た？」

「あ、見たよ〜！」

二人が話し始める。

俺は自分の席に座り、小森のいるであろう場所を見つめる。

(……なんで俺だけが彼女を見れないんだ?)

小森を見えていないのは俺だけで、他の人間はしっかりと認識できているらしい。鏡や携帯越しに彼女を見てみたが、効果はなかった。

「……あ、あの」

「……ん？ あ、ああ、どうした小森？」

最近は慣れたものだ。

小森が俺に話しかけているのかどうかすぐに分かるようになった。

「そのう……そんなに見つめられると……！」

「あ、わ、悪い！」

「あれあれ〜？ はるくん？」

ニヤニヤして東雲が近寄ってくる。

「……なんだよ」

「ひよつとしてえ、もしかするのははるくんの方なんじゃないの〜？」

「ゆりちゃん、それってどういう……?」

また東雲が阿呆なことを言い出した。

ガシツと頭を鷲掴み、力を込める。

「あいだだだだだだっ?! 割れる! 割れちゃうよ、はるくん!」

「割るんだよ」

「ちよつと!」

「……フフ、仲良いですね」

恐らく小森は俺と東雲の様子を見て笑っているのだろう。

俺には分からないが。

「ちよつ!」 笑ってないで助けてよトーコちやあああんツ!」

「割れても良いってことだろ」

「ち、違うよゆりちゃん!」

「いいから助けて!」